九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

我が国宗教民俗文化における「左（手）の優越」

松永，和人
福岡大学人文学部

https://doi.org/10.15017/2235370

出版情報：九州人類学会報. 15, pp.13-15, 1987-07-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

我が国宗教民俗文化における「左（手）の優越」

松　永　和　人

私は，数年前，福岡県八女市近郊農村の研究調査を実施していたとき，そのムラの氏神祭祀と（仏式）の葬制とに，ともに，「左（手）の優越」の事実が示されていることを知った。具体的にいえば，氏神社にかざるシメナワが「左ナイ」であるとともに，一方，その氏神祭祀とは「死のケガレ（不浄）」の観念の故に相反発する関係にある（仏式の）葬制上，かって，土葬であった頃，棺をしばるナワ（「棺ナワ」）がまた「左ナイ」であったのである。以上のほか，氏神祭祀上，いろいろな点で，「左（手）の優越」の事実がみられる一方，不幸にして，死者を出した家の者は，「死のケガレ」観の故に，一年間，宮の鳥居をくぐらず，境内に足を踏みいれることもなく，氏神祭祀に参加しないといったことなどに示されているように，氏神祭祀とはいわば相反発する関係にある（仏式の）葬制上にも，幾多の点で，「左（手）の優越」の事実が顕著にみられるのであった。私は，このような事実に大きな関心をいだき，そのムラで幅広く調査をおこなうとともに，その後，北部九州のいくつかのムラで，同じ調査をおこなってきているのであるが，いずれのムラにおいても，同様な事実がみられるのである。その具体的な事例については，本論の末尾にかかげる参考文献を見ていただきたいが，一例をあげれば，大分県豊後高田市近郊農村でも，以上のように「シメナワ」と「棺ナワ」とがともに「左ナイ」であるということのほかに，秋祭りの「オミコシ」（「御神幸祭」）に際してミコシのカツギ手がはくワラジの緒が「左ナイ」であるとともに，その同じムラで，かって，土葬であった頃，棺をかつぐ人がはいていた「葬式ワラジ」の緒が，また，「左ナイ」であったのである。そのムラでは，秋祭りの準備としての「シメオロシ」――(秋祭りの一週間前，古いシメナワと新しくなったシメナワとを取替える行事)―― の後に死者が出て，その葬列がミコシが通る予定の道をどうしても横切らざるをえなかった場合，その横切った道の両脇三尺ずつ土をけずって土を入替えなければならなかったほど，「死のケガレ」観が強かったところである。今日でも，死者の出た家の者は，氏神祭祀から遠ざかり，もしミコシをかつぐ当番にあたっていたら，除外してもらい，また，一年間，鳥居をくぐることもなく，境内に足を踏みいれることも決してない。このようなムラにおいて，前述のように，氏神祭祀上のワラジ ――(ミコシをかつぐ人のはくワラジ)―― と，一方，かって，（仏式の）葬制上にみられたワラジ ――(棺をかつぐ人がはいていた「葬式ワラジ」) ―― の緒とが，ともに，「左ナイ」なのである。このように「シメナワ」・「棺ナワ」とがともに「左ナイ」であり，また，ミコシをかつぐ人のはく「ワラジ」とともに「葬式ワラジ」の緒がまた「左ナイ」であったといったことなどに典型的に示されているように，「浄」(氏神祭祀) と「不浄」(仏式の葬制) とにともに「左（手）の優越」の事実が，私の知るすべてのムラにおいて，いろいろな点で，みられるのである。そのような事実は，1909年に発表されたロベール・エルツ (Robert Hertz) の「右手の優越――宗教的両極性の研究――」(La prééminence de la main droite : étude sur la polarité religieuse, The Preeminence of the Right Hand : A Study in Religious Polarity) 以来，文化人類学上，問題とされてきているいわゆる文化の「二元（的構造)論(dualism)」――「右手」－「浄」，「左手」

－「不浄」――といった「右」・「左」のあり方とは異なったあり方といわなければならないのかもしれない。問題は，そのような事実をいかに理解するかということであるが，葬制上の「左（手）の優越」に関しては，「サカサ」ないし「ギャク」ということが明確に示されている。たとえば，「サカ（サ）グワ」といって，いつもの豊作業では「右手」を先にし「左手」を後にして鍬を持つのに対して，かって，土葬であった頃，墓穴に土をかける際には，「逆」に，「左手」を先にし「右手」を後にして鍬を持ったといい，また，「サカサ（ないし，ギャク）ビシャク」といって，「湯灌」に際して，ヒシャクを，いつもの「右手」に持つ持ち方とは「逆」にして，「左手」に持つということもある。なお，また，その「湯灌」に際して，「サカサ水」といって，いつもは湯に水を入れて適温にするのに対して，水に湯を入れて適温にしているし，このように，葬制にかかわって，「逆」ということが明確に示されているのである。また，葬制上，「左（お）膳」ということをよくきくが，それは，常日頃（および祝事）の膳（料理）の並べ方とは「逆」に並べた膳（料理）のことである。（勿論，料理の内容そのものが常日頃および祝事の場合と異なることはいうまでもない。）このようにして，葬制上の「左（手）の優越」は，日常生活（および祝事）上の「右」の「逆」としてとらえうるものと思われる。

ところが，一方，氏神祭祀上の「左（手）の優越」に関しては，そのような「逆」ということを知ることができない。それよりも，ムラの神官およびムラ人とのシメナワの張り方などに関する会話の中で，農業上，とくに，水田稲作上，ムラの人々が重視している方位としての「南」と「東」とのかかわりにおいて，その氏神祭祀上の「左（手）の優越」の事実が理解されていることが浮び上ってきている。そのくわしい説明については，本論の末尾にかかげる私の小論を見ていただきたいが，それは，要するに，氏神社が「南」面することを基準として，太陽の昇る「東」側にシメナワの「ナイ始メ」（「元」，「根」，あるいは，「頭」）をおくが，その「東」側は（神からいって）「左」側にあたるという（「左」と「東」の符合としての）説明である。そのことは，たとえば，京都の都市構造において，「東」側が「左」京区であるということと原理的に同じ説明なのである。氏神祭祀上の「左（手）の優越」に関するこのような説明をさらに検討することを今後の課題としている。確かに，氏神祭祀上，場合によっては，「右」がみられることも事実である。私の知る氏神祭祀で，（「左マワリ」が多くの事例でみられる一方），たとえば，「御田植祭」で，水田のまわりを「右マワリ」にまわっているところもある。そのような「右マワリ」をいかに理解するかということも極めて重要であることはいうまでもない。ところが，そのように「右マワリ」にまわっているところでも，シメナワの「左ナイ」をはじめとして，「左」の事実が，また，顕著に示されているのである。そのために，我が国の宗教民俗文化においては，「左」が「浄」（氏神祭祀）と「不浄」（仏式の葬制）とに，ともに，結びついているとしてとらえる方がより基本的なのかもしれないということも考えられる。今後，まず，そのような事実認識を深めるとともに，そのような事実のより正しい理解・解釈に努めたいと考えている。

参 考 文 献

松永和人

1. 「日本農村社会における『左』の二つの原理――福岡県八女市近郊農村の氏神祭祀・葬制上の『左』について――」
   『儀礼と象徴――文化人類学的考察――』
   （吉田禎吾教授還暦記念論文集）九州大学出版会，1983年
2. 「大分県日田郡中津江村における氏神祭祀・葬制上の『左（手）』の習俗について」『福岡大学人文論叢』第16巻第2号，1984年
3. " The Importance of the Left Hand in Two Types of Ritual Activity in a Japanese Village"
   in Hendry, J. and J. Webber(eds.)
   INTERPRETING JAPANESE SOCIETY: ANTHROPOLOGICAL APPROACHES, JASO (Journal of the Anthropological Society of Oxford) Occasional Papers No. 5, Oxford. 1986年
4. 「福岡県・大分県下農村における氏神祭祀・葬制上の『左（手）の優越』について」『民族学研究』第51巻第4号，1987年